

理事長就任のご挨拶

理事長 廣田 勇*

この度改選されました日本気象学会新理事会の決定により、第30期気象学会理事長の任を引き受けることになりました。もとより浅学非才の身に余る重責を痛感しておりますが、精一杯の努力をして参りたいと思っております。理事長代理には二宮汎三理事のご快諾を得てその任をお引き受けいただきました。あわせてよろしく御願ひ申し上げます。

さて、気象学会はこれまで歴代理事長のご指導のもとに、様々な方向への発展を続けてまいりました。特に近年は「地球環境問題」や「気象予報士」に象徴されるように、社会との接点に関心が向けられ、それらの分野に主たる活動の場を置く新しいタイプの学会員が増加してきました。また、大学院制度の改革に伴い、全国の大学で広い意味での気象学に関連する教育の場が拡充され、多様なテーマを専攻する若い世代の人々の数も急増してきました。

このような現状認識に立って、これからの気象学会の進むべき方向を考えるのが、私に課せられた責務のひとつであろうと思います。その出発点は、きわめて当然のことながら、間口・分野の拡大が広く浅くではなく、質的向上を伴うものでなければならないことです。

そのためには、気象学会本来のバックボーンである「学問としての気象学」をこれまで以上に強く意識してゆく必要があります。具体的には、春秋の大会や研究会での成果発表・討論の活性化、気象集誌・天気・気象研究ノート等の機関誌の内容充実、各機関・組織における優れた後継者の育成、などが何より重要です。学会の大きな機能のひとつである学会賞をはじめとする各賞の顕彰は、その成果の発展度・充実度を測る大切な目安であるはずで、それはまた、気象学における先達の貴重な遺産・伝統の価値を忘れることなく、その上に一歩ずつさらに新しいものを積み重ね

てゆく努力をすることに他なりません。

学会員諸賢に対して釈迦に説法かもしれませんが、新しいということの意味を私はこんなふうに考えています。“Classic”を「古典」と訳したために、それを「古いもの」と解釈するのは大きな誤りである。Classicとは文字どおりクラスワンスなわち「第一級」という意味である。単に古いだけの“Old Fashion”と混同してはいけない。新しさの意義は、それが時を経ても輝き続けることが立証されたときにはじめて価値を持つ。

その意味で、20年30年前の学会講演予稿集を開いてみると、その当時は一見新しく思われたにも拘わらずいつのまにか消え去ってしまったテーマがあるのは淋しく感じられますが、一方、現在まで脈々と続いて発展してきているテーマの多々あることは心強い限りです。私の専門分野である大規模力学について具体例を挙げるなら、研究の世界で旧来のラジオゾンデ観測が最新の衛星観測にとって変わられても、あるいはハンドアナリシスがコンピュータ客観解析に置き換えられても、波動伝播や過度保存などの基本概念が不要になったわけではありません。否、むしろ、新しい観測解析が、対象とする領域や物理量を拡大してゆけばゆくほど、基本的なものの考え方の価値は強く認識されてきます。この事情は最近の大会でのシンポジウムや専門分科会の盛況ぶりを見れば明らかでしょう。

幸いにして、気象学会の運営形態は前任諸氏のご尽力により健全な道を歩んでおりますので、今期とくに大幅な組織・運営の路線変更は要しません。庶務や会計をはじめ、ふだんあまり表面には見えない各種実務に関する委員会の着実なお仕事ぶりには全幅の信頼を寄せております。このような理事各位および委員会メンバー諸氏のご尽力を基盤として、会員諸賢がそれぞれのお立場から気象学の発展に寄与されることを切に念願し、就任のご挨拶といたします。

* 京都大学大学院理学研究科

© 1998 日本気象学会